

# 留学生支援システムの構図

A Framework of the Support System for International Students

黒田 史彦

## 要旨

2011年、早稲田大学日本語教育研究センターは、大学院日本語教育研究科と連携しながら、留学生支援ネットワークの総体である「留学生支援システム」を設置した。

留学生支援システムでは、早稲田大学に在籍するすべての留学生が日本語学習リソースにセルフ・アクセスすることにより、自律的な日本語学習を実現できる個人的学習環境の創出を目指している。同時に、すべての留学生が留学生サポートにセルフ・アクセスすることにより、自己実現が可能な個人的修学環境を作り出すことを目標として掲げている。

留学生支援システムの支援拠点として開設した「わせだ日本語サポート」では、日本語教育学を専攻する大学院生が支援スタッフとして待機し、ナビゲーター、アドバイザー、そして、日本語学習リソースとしての役割を果たしながら支援を行うピア・サポートを実施している。

留学生支援システムは、教室の外に留学生のための新しい学びの場を拓くことに挑戦している。さらに、この取り組みを足掛かりとして、自分自身のことを十全に分析し、主体的な学びを継続的に成す姿勢を備えた人間、つまり、生涯に渡って学ぶ姿勢を備えた人間を育む大学空間の創造を見据えている。

キーワード：留学生支援システム、わせだ日本語サポート、セルフ・アクセス、個人的学習環境、個人的修学環境

## 1. はじめに

日本政府による「留学生 30 万人計画」の策定を受け、国内の大学をはじめとした各教育機関における留学生は着実に増加し、その多様化も飛躍的に進行している。しかし、急激な留学生の増加と多様化の速度は教育機関の予想を大きく超えるものであり、受け入れ体制の整備が十分に整っているとは言えない。従来は、日本語の教室や授業を増設することによって、留学生の受け皿を確保しようという努力が一般的に行われてきた。しかし、様々な背景やニーズを持つ留学生すべてに満足のいくカリキュラム運営は年々困難となり、もはやこの対処方法は限界に近づいていると言わざるを得ない。

このような問題を抱えている教育機関にあっては、問題解決に向けた現実的な次の一手を早急に打たなければならない。専門教育も事務手続きもすべて英語で済ませることができるようなプログラムを大学内に設置すればよいという主張もあるが、留学生は常に学内に留まっている訳ではなく、学外に出て一市民として生活するに際しては、日本語を使用する必要に迫られるのが実状である。したがって、英語に依存するプログラムを設置すれば留学生が抱える問題を容易に解決できるとは到底考えられない。

本稿では、教室だけに頼る日本語学習・日本語教育ではなく、英語による教育の享受・提供でも

ない、第三の可能性を探る。つまり、大学において日本語を学ぼうとする留学生の目を教室の外にも向けさせ、個々の留学生に相応しい学習環境と修学環境を実現するための理念と実践について論を展開し、従来型の学習・教育に対する固定観念の転換が大学全体に必要であることを述べる。

次節以降においては、教室や授業だけに囚われない自律的な日本語学習に対する支援を基軸としながら、実り多い留学生生活を実現できる大学空間の創造を目指している早稲田大学日本語教育研究センターの取り組みについて論じる。特に、学習支援および修学支援の役割を担う支援機構である「留学生支援システム」と、その要となる「わせだ日本語サポート」について、設置背景や理念、運営方針、そして実践状況について詳しく述べていく。

## 2. 留学生支援システム

2011年現在、早稲田大学には約4000人の留学生が在籍しているが、2020年までには留学生を8000人に倍増しようという計画が動き出しており、毎年、留学生数は確実に増加している。他大学等の教育機関と同様に、早稲田大学においても留学生の受け皿として日本語科目（授業）を増設しており、約200名の授業担当者（日本語教師）が週あたり750コマ以上の日本語科目を開設している。しかし、今後も増加する予定の留学生を受け入れるために必要な授業担当者や教室の確保は、既に極限状態に近づいている。また、日本語科目の数や種類が増えれば増えるほど、履修計画を立てたり科目登録手続きを行なう際に支障をきたす留学生も増える。授業の内容、開設の曜日、時間、場所（キャンパス）などの都合で、日本語科目を受講したくてもできない留学生の数も無視できないほど増えている。さらに、多様な背景やニーズを持つ留学生の中には、一斉授業という形態の語学クラスに馴染めない者も少なくない。日本語で苦勞する留学生が増える中、大学内外の留学生生活における問題を抱え込む留学生も増加している。

もちろん、大学内には日本語科目以外の日本語学習リソースも準備されており、留学生向けの留学生サポートも整備されつつある。たとえば、日本語教育研究センターでは、随分以前より日本語チューター制度を設けている。しかしながら、このような日本語学習リソースや留学生サポートについては、留学生からのニーズは多分にあるものの、十分に活用されているとは言えない状況であった。これは、日本語教育研究センターや留学生受け入れ担当部署である留学センター、学生間の国際交流担当部署である国際コミュニティセンターなどが提供する学習リソースや留学生サポートに関する情報が、部署ごとに散発的に発信されるに留まっていることに起因する。つまり、有益な情報であっても、一箇所に集約されることがないため、その情報を必要としている留学生の元まで効率的に到達していなかったのだと考えられる。

以上のような日本語学習上の問題および留学生生活上の問題を包括的に解決し、留学生の学習環境と修学環境を改善していくためには、全学的な留学生支援機構が必要となる。このような発想から日本語教育研究センターに設置されたのが、「留学生支援システム」である<sup>1)</sup>。留学生支援システムの理念は、個々の留学生が自分にとって必要な日本語学習リソースや留学生サポートに、安心してセルフ・アクセスできるような大学空間の創造を目指すことである。日本語学習リソースへのセルフ・アクセスが可能であるということは、留学生が自らに必要な日本語を、都合のよい時に、最適な方法で、主体性を発揮して計画的に学ぶこと、すなわち、自律的な日本語学習を実現することである。また、留学生サポートへのセルフ・アクセスが可能であるということは、留学生が自分ら

## 黒田史彦／留学生支援システムの構図

しく生きていくための修学環境を自らの働きかけによって作り出すこと、すなわち、自己実現のための留学生生活を築き上げていくことである。自律的な日本語学習を実現できる学習環境と留学生生活における自己実現を可能とする修学環境の創出を理念に掲げ、あらゆる日本語学習リソースや留学生サポートと個々の留学生との間を有機的に取り結ぶ支援ネットワークの総体が留学生支援システムである。

日本語教育研究センターでは、留学生支援システム構築の一環として「わせだ日本語サポート」を開設し、新しい留学生支援活動の拠点としている。わせだ日本語サポートでは、大学院日本語教育研究科と手を組んで大学院生を支援スタッフとして配置し、ピア・サポートを実施している。最初に、留学生支援システムの主要構成と機能について、概念図を示しながら解説していきたい。

## 2.1. 日本語学習リソースと留学生サポート

留学生自身による主体的なセルフ・アクセスを可能にする大学空間を作り出し、日本語学習と留学生生活を多面的・総合的に支援する使命を持つ留学生支援システムでは、まず、留学生が必要とする日本語学習リソースや留学生サポートに関する情報を収集しなければならない。

日本語学習リソースとは、留学生の日本語学習に結びつき得るあらゆるヒト・モノのことである。早稲田大学にあつては、わせだ日本語サポートとその支援スタッフ、日本語学習の計画を立てたり振り返りや自己評価を行ったりする際に利用可能な自己管理ツール（例：学習計画シート）、日本語教師をはじめとした日本語教育に携わる教職員、多種多様な日本語科目、日本語チューター制度、「にほんごわせだの森」（池上 2009）、図書館や学生読書室の蔵書と日本語学習材、学生用パソコンルーム、アカデミックな文章の作成を支援するライティングセンター、国際コミュニティセンター、国際交流サークル、留学生の友人・級友・先輩などにあたる（日本人に限らない）学生などが挙げられる。学内だけではなく、学外地域や WEB 上にも数多くの日本語学習リソースが存在している。

留学生サポートとは、留学生生活の質的向上に結びつき得るあらゆるヒト・モノのことであり、日本語学習リソースをも包含するより広い概念である。上述のわせだ日本語サポートや支援スタッフなどの日本語学習リソースに加えて、留学生支援に関わる教職員、留学センター、留学生の就職活動を支援するキャリアセンター、学生寮を管轄するレジデンスセンター、心身の健康を管理する保健センターと学生相談室の各種サービスなどが挙げられる。その他、学外地域や WEB 上には、自治体などによる留学生サポートも多い。

図 1 は、留学生のための日本語学習リソースと留学生サポートを概念的に示したものである。一番外側の四角い枠は、或る留学生が物理的に、または、WEB 上でアクセス可能な最大範囲である。丸印が日本語学習リソース（R）ないし留学生サポート（S）を表している。実線の丸印は、その存在や役割を留学生に認識されているものであり、破線の丸印は、その存在や機能を留学生に知られていないものである。いかに優れた学習リソースや留学生サポートであっても、留学生に認知されていないのでは、存在していないも同然である。大学内外および WEB 上に、どのような日本語学習リソースや留学生サポートがあるのかという情報を広範に収集し、適切に分類・整理した上で留学生に提供していくことが留学生支援システムの最初の任務である。

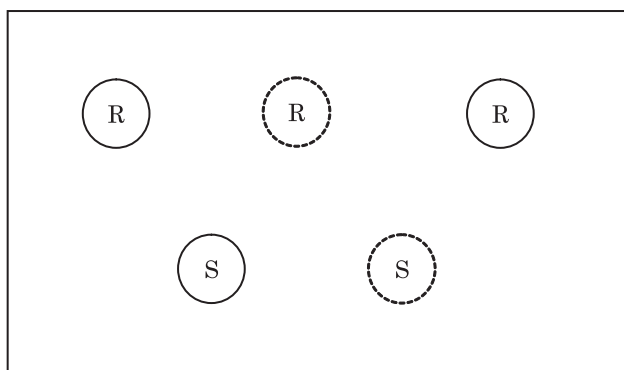


図1 日本語学習リソースと留学生サポート

## 2.2. セルフ・アクセス

セルフ・アクセスとは、留学生が主体的に日本語学習リソースや留学生サポートを活用することである。学習リソースや留学生サポートを利用するか否か、いつからいつまで、どのように利用するのかについては、留学生自らの判断に基づいて決定されなければならない。周囲の人間が留学生を無理にアクセスさせることはできても、それは健全なセルフ・アクセスとは呼べない。決定権は、すべて留学生が持っている。

留学生支援システムでは、留学生が主体的に日本語学習リソースにセルフ・アクセスすることを、「学び」の第一歩と考える。図2 (a) では、留学生（フェイスマーク）が既知のリソースにセルフ・アクセスして「学び」を実行していることが、矢印を使って概念的に示されている。

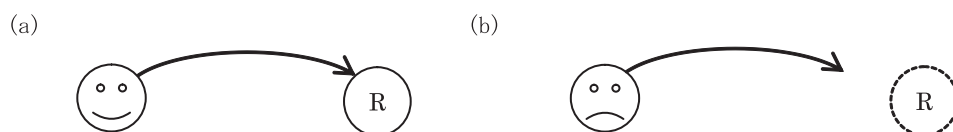


図2 セルフ・アクセス

セルフ・アクセスを可能にするためには、留学生のニーズに即した日本語学習リソースや留学生サポートを留学生に紹介し、十分に理解してもらうことから取り掛からなくてはならない。もし大学内外やWEB上に留学生のニーズに応えられる学習リソースや留学生サポートが存在していたとしても、留学生がその存在を知らなければ、アクセスすることは叶わない。図2 (b) では、留学生が日本語学習リソースの存在について認識していないために、セルフ・アクセスできない様子、つまり、学びが形成されない状況が図示されている。留学生支援システムは、留学生による日本語学習リソースと留学生サポートへのアクセス可能性を確実なものとするために、アクセス経路の確保に努めている。アクセス可能性が高まるということは、とりもなおさず、留学生にとっての学習環境と修学環境が充実するということである。

## 2.3. 支援ネットワーク

留学生が日本語学習リソースや留学生サポートに首尾よくセルフ・アクセスするためには、学習

## 黒田史彦／留学生支援システムの構図

リソースや留学生サポートの情報を収集・蓄積しておくだけでは不十分である。各リソース、各サポート間の連携を強化したり、必要のない重複を解消したり、足りない部分を補い合ったりするような調整をリソースやサポートの提供元に働きかける必要がある。あくまで留学生の立場から見ると、無理・無駄のない支援ネットワークが形成されることが望ましい。

図3は、4つの日本語学習リソースが、結節点（四角形）を介してお互いに結びついている様子を、簡略的に表している。実際には、無数の学習リソースが相互に直結しており、より目の細かい網目状のネットワークを形成しているはずである。そして、日本語学習リソースと留学生サポートを結んだネット（網）で、問題や疑問を抱えて困っている留学生をすくい上げようと試みる仕組みが、留学生支援システムであるとも言える。

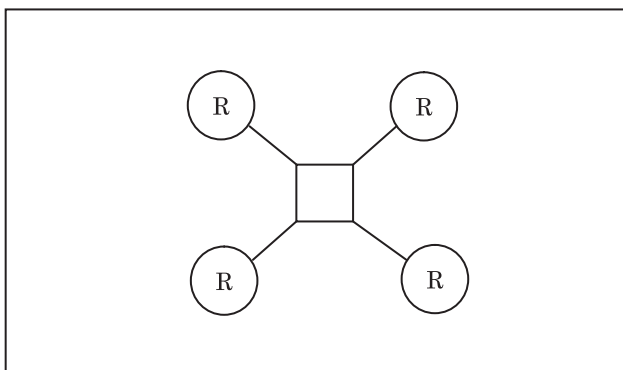


図3 支援ネットワーク

#### 2.4. ポータル経由のセルフ・アクセス

数多くの日本語学習リソースと留学生サポートから構成される支援ネットワークの総体である留学生支援システムには、留学生が希望する学習リソースや留学生サポートに容易にセルフ・アクセスできるような仕掛けも必要である。つまり、支援ネットワークへの最初のアクセス・ポイントとなり得るポータル（入口）がなくてはならない。

ポータルとは、いわば旅行者向けのインフォメーションセンターのようなものである。旅行者は、必要な時にインフォメーションセンターを訪れ、自分が求めている情報を得ることができる。たとえば、旅行者が現代美術を鑑賞したい場合、どのような美術館がどこにあるのか、どんな美術品が展示されているのか、開館時間は何時から何時までか、入場料はいくらか、何か特別なイベントが催されていないか、その美術館に行くにはどの交通機関を使うのが最も便利なのか、一か所だけではなく複数の美術館を訪れた方が有意義なのか、といった有益な情報をまとめて得ることができるのがインフォメーションセンターである。

同様に、何らかの支援を求める留学生は、最初にポータルに立ち寄って、自分に利用可能な日本語学習リソースや留学生サポートに関する情報を一括して入手し、今の自分に最も相応しいと思われる学習リソースや留学生サポートを選んで自らアクセスする。

図4は、留学生がまずポータル（P）にセルフ・アクセスし、その後、日本語学習リソースと留学生サポートにセルフ・アクセスしている様子（放射状に広がる4つの矢印）を概念的に表してい

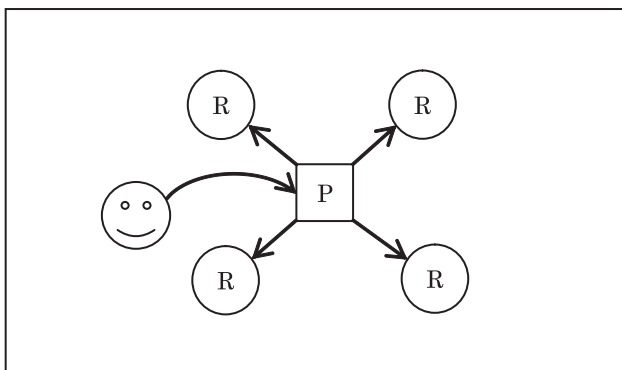


図4 ポータル経由のセルフ・アクセス

る。留学生は、最初にポータルにセルフ・アクセスし、あらかじめ張り巡らされたアクセス経路を辿ることにより、容易に学習リソースや留学生サポートに到達できる。

## 2.5. 個人的学習環境と個人的修学環境

日本語学習リソースや留学生サポートへセルフ・アクセスするための道筋が確立されたからといって、すべての学習リソースや留学生サポートが常に等しくアクセスされる訳ではない。セルフ・アクセスが留学生による主体的な活動である以上、いつ、どの学習リソースを使って学ぶのか、何回くらい、どのくらいの頻度で留学生サポートを利用するのか、といった判断は、すべて留学生本人に委ねられている。留学生は、今の自分にとって最も相応しい学習リソースと留学生サポートを見極め、セルフ・アクセスする権利を有している。もちろん、ある学習リソースや留学生サポートにはアクセスしない、あるいは、もう必要のなくなった場合にはアクセスをやめる、という決定も可能である。

このような一連の主体的営みによって、留学生は自分自身に相応しい大学空間、すなわち、自律的な日本語学習を実現できる学習環境と、自己実現を可能とする修学環境を作り出すことができる。自分だけのために主体的にデザインした学習環境を、「個人的学習環境」と呼ぶ。

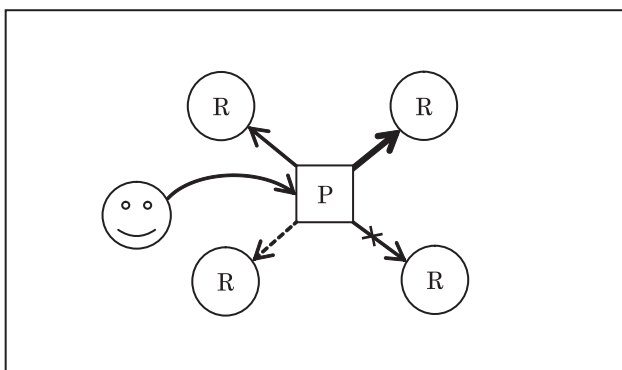


図5 個人的学習環境



## 黒田史彦／留学生支援システムの構図

図5の概念図では、留学生がポータルを經由してアクセス経路を通り、日本語学習リソースにセルフ・アクセスしている。注意すべきは、アクセスを表す矢印の描き方である。太い矢印は、留学生が学習リソースを頻繁に利用していることを表している。×印の付せられた矢印は、かつては利用していたが、現在は使わなくなっていることを表し、破線の矢印は、今はまだ利用していないものの、将来的に活用しようと計画されていることを表している。言うまでもないことだが、この図には描かれていないものの、まったくアクセスしない学習リソースも数多くある。

個人的学習環境は、留学生が自分だけの日本語学習環境をうまく作り上げたモデル例である。同様に、留学生が今の自分に最も相応しい留学生サポートを選択し、セルフ・アクセスを実行している場合は、自己実現のための理想的な「個人的修学環境」がデザインされたと言える。

このように、日本語学習リソースや留学生サポートをいかに計画的に、継続的に活用し、自己成長のための個人的学習環境や個人的修学環境を築き上げていくのかについて、留学生は、試行錯誤を繰り返しながら、十分に検討し、主体的に取り組んでいかなければならない。

## 2.6. 自律

今の自分にはどのような日本語が必要なのか、将来の自分は日本語とどのように付き合っていくのか、理想的な自己を実現していくためには、どのような個人的学習環境と個人的修学環境が必要なのか、留学生は常に考え、行動しなければならない。長・中・短期的な目標達成のために、いつ日本語学習リソースにセルフ・アクセスして学ぶべきか、どんな留学生サポートにセルフ・アクセスしてサービスを得るべきか、どのリソースとサポートを組み合わせるべきか、いかなる個人的学習環境と個人的修学環境を設計すべきか、検討すべきは多岐に渡る。

しかし、上述したように、セルフ・アクセスをするかしないかについての判断、あるいは、学習リソースや留学生サポートの取捨選択は、すべて留学生自身が最終的な決定を下すべきことである。個人的学習環境と個人的修学環境は、留学生が主体的にデザインしなければ実現しない。時に失敗することもあるだろうが、その失敗から学ぶことも大きい。むしろ、失敗を繰り返すことで、自分に相応しい学びと留学生生活の在り方やその実現方法、自己管理の方法に対する理解が深まるとも言える。

このように、自分の現状や将来についてしっかり自己分析し、自己理解を深め、いかに自己実現を可能にしていくのか、どのような学びを形成していくのか、自分自身でよく検討し、自らの判断で行動計画を立てて実行し、折をみて自己検証し、継続的・計画的に自己成長に努めることが自律であり、自律的学習であると考えられる。そして、まず自分自身のことを主体的によく考えることが、自律／自律的学習へ向かう第一歩だと言える。もちろん、常に何か行動するだけではなく、「ひと休みして息抜きをする」「今は何もしない」という選択や、よく考えた上で「今の自分には講義形式で受け身型の授業が必要だ」という判断も、留学生生活や学びに対する自己管理の一部であり、自律性の発現として尊重すべきものである。

## 2.7. ポータルを經由しないセルフ・アクセス

留学生たちが日本語学習リソースの利用を始めるに際しては、まずはポータルをくぐり、学習リソースに関する情報を得て十分に吟味し、自分に最適な学習リソースへセルフ・アクセスすることが多いだろう。学習の進捗状況に合わせて、新たな学習リソースを探すためにポータルを訪れるこ

とも予想される。しかし、或る時点における個人的学習環境を構築してしまえば、当然、ポータルへのアクセス回数は減る。

当然のことだが、ポータルの利用回数の減少が、即、留学生支援システムの衰退を意味する訳ではない。留学生が自らの学びについて主体的に考え、相応しい日本語学習リソースに計画的にセルフ・アクセスして学習に取り組むことが自律的な学習だと考えるのなら、何も毎回ポータルを経由してから学習リソースへアクセスする必要はない。

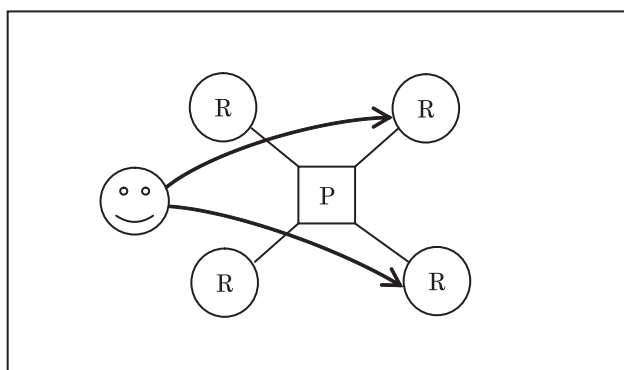


図6 ポータルを介さないセルフ・アクセス

図6は、留学生がポータルを経由することなく、学習リソースへ直接セルフ・アクセスしている様子を概念図化している。つまり、留学生は、学習リソースへアクセスするための既定の経路を辿るだけでなく、新たなアクセス経路を独自に確立したことになり、個人的学習環境をより整備し、自律的な学びを一步前進させたとも言える。もちろん、この留学生が、次のステップの日本語学習について模索し、個人的学習環境を更新しようとする時には、再びポータルを訪れるかもしれない。その時に備えて、ポータルは常に開かれていなければならない。

上で述べたことは、日本語学習に関してだけでなく、留学生生活全般についても当てはまることである。留学生が新たな個人的修学環境を作るために新規の留学生サポートを必要とする時に備えて、留学生サポートへの入口となるポータルは、いつでも確実にアクセス可能な状態になければならない。

### 3. わせだ日本語サポート

支援ネットワークの総体である留学生支援システムと留学生との最初の接点となるポータルが不可欠であることは既に確認した。このポータルは、早稲田大学においては「わせだ日本語サポート」という形で具現化されている<sup>2)</sup>。問題や疑問を抱えた留学生が最初に訪れるポータルは、いつも決まった場所にあり、常に広く開かれ、誰でも躊躇なくアクセスできることが望ましい。わせだ日本語サポートも、留学生にとって、間口が広く、敷居が低い支援ポータルとしての運営を目指しつつ、体制を整備している途上である。

以下においては、わせだ日本語サポートでピア・サポートを実践している支援スタッフの役割について、特に、ナビゲーター、アドバイザー、そして、日本語学習リソースとしての役目について



## 黒田史彦／留学生支援システムの構図

詳しく述べていく。その後、スタッフ・ディベロップメントについても言及したい。

### 3.1. ピア・サポート

わせだ日本語サポートでは、大学院日本語教育研究科で日本語教育学を専攻している複数の大学院生たちが、支援スタッフとして常駐し、同じ学生の立場から留学生を支援するピア・サポートを展開している。これは、第一に、留学生たちの日本語学習リソースや留学生サポートへ向かうセルフ・アクセスを後押しし、留学生ひとりひとりの個人的学習環境や個人的修学環境の実現を応援するという留学生支援システム全体の目的達成に近づけるためである。

既に述べたように、留学生はしっかり自己分析し、自己理解を深めてから、今の自分に必要な日本語学習リソースや留学生サポートへセルフ・アクセスしなければならない。しかし、セルフ・アクセスは決して簡単な営為ではない。何らかの手助けを必要とする留学生には、人的・物的支援が不可欠である。その支援の一環として、わせだ日本語サポートが開設され、支援スタッフが配備されているのである。

支援スタッフの本務は、セルフ・アクセス支援である。留学生への指導や教育を行うのではなく、あくまで同じ学生の立場から、共に問題解決への糸口を探っていく。あらゆる決定や判断は留学生に任せ、主に日本語学習リソースや留学生サポートの紹介や提案を行う。特に重視すべきは、友好的な個別対話を通じて留学生と良好な関係を築いた上で、どのような学習リソースや留学生サポートが必要なのか次第に明らかにしていき、適切かつ現実的な学習リソースや留学生サポートへの主体的なセルフ・アクセスを促すことである。問い合わせに即座に答えられなくても、留学生と一緒に解決方法を検討したり、学習リソースや留学生サポートを探したりすれば十分である。

同じ目線で一緒に物事を考えられるというメリットは何物にも代え難いが、学生による学生のための支援活動であるが故に、ピア・サポートには限界がある。どんなことでも相談はできるが、全ての質問に答が得られる訳ではない。例えば、大学院などの入学試験に関する質問に関しては、公になっている入試日程などの情報の他は答えられない。特に、「研究計画書」や「志望動機」など、入試の可否を直接左右するような書類は一切扱えない。他に適当な学習リソースや留学生サポートが見つからないからといって、支援スタッフが何でも引き受けることはできない。それは、わせだ日本語サポートにおける支援スタッフの役割ではない。「できないことはできない」とはっきり断る必要もある。留学生のニーズに合致する学習リソースや留学生サポートが存在しないということも明らかにするの、ひとつの支援の在り方である。

問題や疑問を抱える留学生に最初に接するのは支援スタッフではあるが、問題解決に当たるのは支援スタッフだけではなく、常に留学生支援システムに関係する教職員も支援活動に取り組む。留学生を支援スタッフが支え、支援スタッフを教職員が支える多層的な構造である。深刻な問題を抱えた留学生から相談を受けることによって、同じ学生である支援スタッフが大きな問題を抱え込む事態は避けなければならない。留学生に対する支援体制は、わせだ日本語サポートの中で完結している訳では決していない。わせだ日本語サポートの支援スタッフが扱い切れない事案は、すぐに留学生支援システムの教職員に引き継げばよい。留学生の持ち込む重大な相談や憂慮すべき悩みについては、わせだ日本語サポート単独の問題としてではなく、留学生支援システム全体の問題として、さらには大学全体の問題として、関係教職員が速やかに危機介入し、問題解決に当たる必要がある(加賀見 2010)。

### 3.2. ナビゲーター

留学生支援システムは、旅行者向けインフォメーションセンターのメタファーを用いると、その働きが分かり易かった。同じメタファーに基づいて支援スタッフの役割を定義するなら、案内係、つまり、ナビゲーターと呼べる。インフォメーションセンターを訪れた来訪者に直接対応する窓口となり、多様な問い合わせに臨機応変に対応し、やり取りをしながらニーズを洗い出し、観光地などに関する情報提供を行い、最適と思われる目的地へ来訪者自身で確実に辿りつけるよう明確に道筋を示し、送り出す。優れた案内係になるには、できるだけ多くの情報を事前に掴んで整理し、あらゆる問い合わせに備えておかなければならない。場合によっては、手製の地図や観光ガイドブックのような特別なツールを準備しておくことも必要である。

同様に、支援スタッフも来訪者（留学生）に対し、迷子にならないよう道案内を行う。わけだ日本語サポートを訪れた来訪者に直接対応する窓口となり、多様な問い合わせに臨機応変に対応し、対話しながらニーズを洗い出し、日本語学習リソースや留学生サポートに関する情報提供を行い、最適と思われるリソースやサポートへ来訪者自身でセルフ・アクセスできるよう明確に道筋を示し、送り出す。優れたナビゲーターになるためには、できるだけ多くの情報を事前に掴んで整理し、あらゆる問い合わせに備えておかなければならない。場合によっては、手製のリソース・マップや留学生ガイドブックのような特別なツールを準備しておくことも必要である。

心身の健康問題をはじめとした専門的な支援を必要としている留学生は、できるだけ早く、学内の専門家や専門部署に確実に取り次いでいかなければならない。そのためには、学内にどのような留学生サポートが準備されているのか、事前によく把握しておくに越したことはない。支援スタッフは、常に、学内だけではなく、学外やWEB上に多数存在している日本語学習リソースや留学生サポートに関する情報収集のためのアンテナをできるだけ大きく張り、それら学習リソースや留学生サポートへの確実なアクセス経路を用意し、留学生の求めに応じていつでも提供・紹介できる体制を整えておきたい。

### 3.3. アドバイザー

留学生を日本語学習リソースや留学生サポートへ道案内するのがナビゲーターの役割であった。学習リソースや留学生サポートへのセルフ・アクセスは、単発的に一度だけで完結するケースもあるだろうが、場合によっては、継続的・計画的に行うべきである。日本語学習も留学生活も中長期に渡って続く営みである以上、支援も継続的になる可能性が高い。継続性・計画性を伴ったナビゲーションがアドバイジングである。

日本語学習に関しては、留学生は、今の自分には「何ができて、何ができないのか」を自己分析し、自分に相応しい現実的な学習目標を設定し、自らに必要な学習リソースへ、いつ、どれくらいの頻度でセルフ・アクセスし、日本語能力の伸びをいつ頃どのように自己検証すべきなのかについて検討しなければならない。つまり、主体的に個人的学習環境を整え、学習計画を練り、実行しなくてはならない。しかし、自らの学習計画を立てるという経験をしたことがある学生は極めて少なく、ほとんどの留学生は何らかの人的・物的支援を必要としている。

支援スタッフは、このような留学生からの要望を受け、対話を重ねながら共に学習の計画を立て、学習の進捗状況を記録し、振り返る手助けをする日本語学習アドバイザーとしての役割を演じることが期待される。ここで求められるのは、日本語学習を直接指導、管理、評価することではな

## 黒田史彦／留学生支援システムの構図

く、留学生の自律的学習が首尾よく実行できるように支えることである。留学生は、自分自身と日本語との関係を見つめ直し、自らの将来像を具体的に描き、その具現化に向けて日本語学習をデザインし、着実に学習を遂行することによって、自らの学びを自己管理する姿勢を身に付けていくこととなる<sup>3)</sup>。学習アドバイザーは、留学生からアドバイスを求められた場合にのみ、具体的な学習方法などを（指導するのではなく）提案する。学習に関する決定権は、常に留学生が持つ。学習アドバイザーは、必ずしも日本語教師である必要はないが、日本語の学習方法（学習ストラテジー／スキル）や問題解決方策について広範な知識を備えていることが望ましい。学習動機の維持や学習を継続できるよう励ますことも、学習アドバイザーの一部である（青木 2001, 2010；青木・田中 2011；小嶋ほか 2010；菅原 2010；関 2006）。

日本語学習を着実に一段一段ステップ・アップさせていくためには、学習が計画通りに進んで目標に近づいているか否かに関して、定期的な自己評価を行うことが効果的である。いつ振り返りを行い、どのような観点から自己評価を行うべきか、学習計画を実行に移す前にあらかじめ決めておくことが望ましい。評価方法については、自分だけが評価することもできれば、周囲の他の人に客観的に評価してもらうこともできる。いずれにせよ、評価基準を自分自身で決めておくことが肝要である。計画が予定通りに進んでいる場合は、新たな目標を設定し、実行する。計画が予定通りに進んでいない場合は、その理由を検証し、学習計画を軌道修正していく。必要があれば、目標そのものも見直せばよい。学習アドバイザーは、学習計画の立案、実行、記録、検証、計画の再設定といった学習サイクルの自己管理が有効であることを紹介し、留学生本人が自らの学びを継続的に管理できるよう手助けする。その積み重ねが、いつか自律的学習の実現につながるはずである。

初めて試みる者にとって、学習を自分自身で適切に管理することは非常に困難である。その負担を軽減するひとつの方法として、自己管理を容易にするツールを準備し、その活用方法を紹介することが挙げられる。わせだ日本語サポートでは、物的支援の提供の一環として、日本語学習と人生設計とを有機的に結びつける「未来マップ」、長・中・短期の各段階における学習計画を相互に関連付ける「学習計画シート」、日々の学習の様子や成果を記録する「学習記録シート」、学習計画が一段落した際に内省するための「振り返りシート」が準備されている。また、今後は、留学生が自らの日本語能力について現状や伸長を把握するための「能力グリッド」や「レーダーチャート」、目標への到達度が明確に分かる「ラーニング・ラダー」など、視覚に訴えながら学習を促進する自己管理ツールの開発にも力を入れ、将来的には、ポートフォリオのような総合的な自己管理ツールに仕立て上げていきたい（青木 2010）。

自己管理ツールは、その有用性についての期待は大きいのだが、実際に留学生が使用する際の負担も極めて高い。劇的な効果とは言えないまでも、留学生にとって何かしら目に見えて実感できるメリットを伴わない限り、自己管理ツールの活用は伸び悩む。どうしたらツールを活用してもらえるか、いかに活用を継続してもらえるか、解決すべき課題も多い。もちろん、自己管理ツールを使用することが目的化してはならない。ツールの利用は、あくまで希望者だけに限定すべきであり、支援スタッフや教職員が使用や作成を義務づけたり押し付けたりすべきではない。留学生の主体性に任せ、使いたいと思う留学生が、使いたいと思う時に、試しに使ってみれば十分である。自己管理ツールを活用してみて、何らかの効果が感じられたのなら、その後の継続利用につながるであろう。

学習アドバイザーは根気の要る取り組みである。留学生が現状を自己分析し、自問自答しながら

ら学習計画を立て、個人的学習環境を整えて学習リソースにセルフ・アクセスし、自律した学習者に育てていくのには長い時間が必要である。その成長ぶりは、学習アドバイザーから見てすぐに認識できるようなものではないだろう。特に、学習スタイルや学習に関わる信念といった部分は、容易に変わる性質のものではなく、学習アドバイザーといえども、安易に揺さ振りをかけるべきものではない。なぜなら、留学生にとっては、今の自分が持っている学習スタイルや信念が正解であり、それ以外は受け入れにくいからである。学習アドバイザーの目から見て、明らかに改善すべきような学習スタイルや学習方法であっても、無理やり変更させるのは留学生のストレスの原因になり、劣等感を植え付けるだけの結果に終わりがかねない。学習スタイルや学習方法については、他にも選択肢があることを、折をみて紹介すればよい。焦らず、気長に待つことも、学習アドバイザーの仕事である。留学生自身が、試行錯誤の末に、自分で気づいて納得するまで待つ。学習アドバイザーは、すぐに留学生に変化が見られないからといって諦めることなく、嘆くことなく、常に遠くに自律的学習の実現を見据えつつ、繰り返しアドバイジングを続けていかなければならない。留学生にとって本当に必要なアドバイスなら、その重要性に気づく時がいつか来るはずである。

今まで日本語学習に関するアドバイジングについて述べてきたことは、留学生活に関するアドバイジング、すなわち、留学生アドバイジングにも当てはまる。まず留学生が自分自身の置かれている状況を分析・把握し、自己実現のために必要な人的・物的サポートに関する情報を収集し、個人的修学環境を構築して継続的・計画的にサポートを活用する。留学生アドバイザーは留学生本人が留学生生活を自己管理していけるよう、過不足なくアドバイスを提供する。

日本語学習に関する相談であれ、留学生活に関する問い合わせであれ、アドバイジングはコーチングやカウンセリングと共通する部分が多い。どんな相手でも受容し、共感を示す。どんなに無理のある主張でも傾聴し、承認する。努力した点や良いところを拾い上げ、称賛する。相手に元気がないようなら、励ます。問題点を明確に意識させ、解決方法を見つけさせるためには、相手本人によく考えさせ、意見を引き出す質問力が重視される。相手が解決策を見つけれなかったら、解決につながる手掛かりを複数提示し、選択させる。いずれも、アドバイジングにも通じる基本姿勢であり、アドバイザーに求められる重要な資質である（井上 1999, 横田・白土 2004）<sup>4)</sup>。

### 3.4. 日本語学習リソース

留学生支援システムにおいて、日本語学習リソースとみなされるヒト・モノの範囲は非常に広い。わけだ日本語サポートも支援スタッフもすべて学習リソースである。支援スタッフによるピア・サポート、スタッフとの対話、スタッフの持つ日本語そのものや各種リソースに関する知識、自己管理ツールやその活用方法に関する説明など、すべてが留学生のための日本語学習リソースだと考えられる。留学生にとって、留学生支援システムへの最初の接点となる支援スタッフは、最も身近で頼れる特別なリソースである。

現時点（2011年12月現在）において、支援スタッフはすべて日本語教育学を専攻している大学院生である。留学生と同じ学生という立場から行うピア・サポートが大原則であるが、日本語教育や日本語学習に関して各々の支援スタッフが持つ専門的知識や経験も貴重な学習リソースであり、それらを活かした支援もある程度は期待される。日本語そのものを教えることは本務ではないが、留学生がセルフ・アクセスすべき学習リソースがどうしても他に見つからない場合には、最終手段として、支援スタッフが学習リソースの役割を果たすこともあり得る。もちろん、あくまで各々の



## 黒田史彦／留学生支援システムの構図

支援スタッフが、自分に可能な範囲で取り組みばよい。特に、クリニック的要素の強い学習支援は、大勢が参加する日本語科目としてではなく、個別対応できるわせだ日本語サポートで提供した方が効果的である。例えば、日本語の発音に関する質問については、音声習得に関する素養のある支援スタッフによる「発音クリニック」的な個別支援が考えられる。これも、支援スタッフの専門性を活かした支援活動であり、他では見つけられない貴重な日本語学習リソースである。

ここで注意すべきは、質問に対して単に答を教えるだけでは終わらせないという点である。相談者（留学生）が持ち込んだ質問に対して直接的な答を与えれば、相談者にとっては目の前の問題が解決して満足でき、支援スタッフも相手が喜ぶので充足感が得られる。したがって、支援スタッフと相談者は、「教える－教わる」という関係に傾斜しやすい。しかし、支援スタッフがアドバイスを与える際には、「なぜそのような答に至るのか」という問題解決の方法についても、合わせて言及しておくべきである。留学生はいつまでも「教わる」立場にいられる訳ではなく、いつかは次のステップに進む。わせだ日本語サポートや大学の外に出れば、独力で問題を解決しなければならず、問題解決能力の有無が日本語学習や留学生活の質を左右することを忘れてはならない。ここでも、支援スタッフは自律の実現を遠くに見据え、学習のノウハウが身につくような支援を常に心掛けなければならない。

支援スタッフの中には、海外からの大学院留学生も多い。そういった支援スタッフは、日本語の先輩学習者として、また、日本における先輩生活者として、有意義な支援活動ができるはずである。スタッフ自身の実体験に基づき、苦勞してきた点、好んで用いていた学習方法、問題解決のための工夫や秘訣などについて、生きた情報源になれる。また、留学生スタッフの母語を活かし、日本語以外の言語による支援活動も可能となる。特にゼロ・スタートの留学生にとっては、母語による日本語学習支援は心強い。支援活動の際に用いる言語は、相談者の状況や相談内容に応じて使い分けことが有効である。

留学生支援システムがわせだ日本語サポートに期待するのは、支援スタッフによる支援活動だけではない。留学生同士が、日本語学習についてはもちろんのこと、留学生活全般に関する情報やアイデアの交換・共有を可能にする共同体、すなわち、留学生が互助的・協働的に支え合うコミュニティを形成できる場や機会、きっかけを提供することも、わせだ日本語サポートの担うべき機能の中に盛り込まなければならない。コミュニティは、狭く閉ざされた場所ではなく、広く開かれた空間にあってこそ真価が発揮できるはずであり、極めて価値のある学習リソースにもなり得る。もし、お互いに日本語を学び合ったり、教え合ったり、相談し合ったりするような留学生コミュニティができた場合、支援スタッフにはファシリテーターとしての役割を担ってもらいたい。言うまでもなく、留学生だけではなく、日本人学生も分け隔てなく参加できるコミュニティが生まれるに越したことはない。

支援スタッフは、留学生と直接接触することから、留学生のニーズを耳にする機会も多い。例えば、大学内外やWEB上にどうしても適切な日本語学習リソースが見つからない場合には、学習リソースの独自開発を検討しなければならない。また、学内に既に存在する学習リソースが留学生のニーズとかけ離れている場合には、その学習リソースの提供元に働きかけ、より価値あるかたちでサービスを提供してくれるよう求めることも必要である。もちろん、こういった働きかけは、わせだ日本語サポートの支援スタッフの役割ではなく、留学生支援システムとして関係教職員が行うべき活動である。息の長い地道な努力により、全学的な留學生理解の促進にも努めなければならない。

そして、留学生からの要望を受けとめ、わせだ日本語サポートや留学生支援システムも、その役割や在り方を柔軟に変えていかなければならないだろう。

### 3.5. スタッフ・ディベロップメント

上述のように、わせだ日本語サポートの運営に関わる支援スタッフは、日本語教育学を学び、研究している大学院生たちである。支援スタッフには、ただ支援活動を行う者としてだけではなく、同時に、実践研究に取り組む者としての目も養ってもらいたい。つまり、わせだ日本語サポートへの参加は、留学生へのピア・サポートを提供することが第一目的であるが、大学院生である支援スタッフの実践者・研究者としての自己成長を促すという側面もある。留学生と同じように支援スタッフも主体的に成長できる環境を整備しつつ、関係教職員によるスタッフ・ディベロップメントの体制を整えていくことが、大学院日本語教育研究科と連携している留学生支援システムの任務である。

留学生は、自らの日本語学習についてよく考え、現状を正確に把握し、長・中・短期的な目標を設定し、具体的な学習計画を立てて実行し、振り返りを行うことが求められていた。同様に、支援スタッフは、留学生支援や日本語学習支援、日本語教育と自分との長・中・短期的な関係についてよく考え、留学生と対話しながら具体的な支援計画を立てて実行に移し、折をみて自己評価する姿勢を持つことが期待される。つまり、留学生と同じように、主体性をもって自己分析し、自己理解を深め、自己研鑽を積み、自己検証を行って自律した支援者を目指す。自律的学習の実現には時間がかかるのと同様に、自律した支援者になるのは容易なことではないが、単に誰かから答を教えられるのを待つだけではなく、常に高い意識を持って、学術的にも実務的にも、自分自身で考える支援者になってもらいたい。今後、支援スタッフ用ポートフォリオなどのツールを導入すれば、内省を一層促進し、自らの成長的変容をしっかり捉えることができ、自己成長の証とすることができるだろう。

共に自律を目指す留学生と支援スタッフが異なる点は、仲間同士で助け合う仕組みがあらかじめ準備されているところである。支援スタッフにとって最も身近な支援リソースは、仲間である支援スタッフである。まず、支援スタッフの担当曜日ごとにチームがあり、取りまとめ役としてのリーダーがいる。毎日の活動の後には、その日の担当スタッフが全員揃って活動内容を振り返るリフレクション・タイムが設けられている。時に教職員も参加しながら、反省点や改善すべき点、良かった点について話し合う。また、毎回の支援内容は「サポート記録」として電子掲示板で共有し、全スタッフと関係教職員が閲覧・コメントできるようになっている。電子掲示板を介して、支援方法やリソース情報などに関するやり取りや議論もでき、次回からのサポート改善へつなげる。定期的なスタッフ・ミーティングや勉強会などの開催も有意義であろう。

具体的な相談内容や支援活動の蓄積を踏まえて、支援リソースとしての「サポート事例集」や「支援ハンドブック」なども整備・拡充していかなければならない。個々の留学生ごとに適切な支援の在り方が異なるのは当然だが（浜田ほか 2006）、過去のサポート情報を参考にして現在の支援活動を充実させることはできる。多くの支援スタッフは、毎学期のように入れ替わるので、何らかの「拠り所」となるヒト・モノがないと新人スタッフは不安になる。もちろん、先輩スタッフやリーダーが後輩スタッフを支え、わせだ日本語サポート内部で支援活動のノウハウを継承していくことも不可欠である。支援スタッフが、わせだ日本語サポートの第一運営者であり、要石であることは、今



後も変わらない。

#### 4. まとめと展望

本稿では、早稲田大学日本語教育研究センターと大学院日本語教育研究科との密な連携によって誕生した留学生支援システムと、その支援拠点であるわせた日本語サポートという2つの取り組みにおける理念と実践状況について論じてきた。

留学生支援システムは、留学生にとって理想的な大学環境を創出することを目指す支援機構であった。つまり、個々の留学生が主体性を存分に発揮し、日本語学習リソースにセルフ・アクセスすることによって、自律的な日本語学習を実現できる学習環境を築いていく。同時に、ひとりひとりの留学生が自ら留学生サポートにセルフ・アクセスし、自己実現が可能な修学環境を創造していく。よって、自分に最も相応しい個人的学習環境と個人的修学環境を留学生自身がデザインしていけるようになる。そのような大学空間を現実のものとするのが、留学生支援システムの最終目標である。

自律的学習の実現に関しては、留学生が今現在の自分について自己分析し、意識的に自己理解に努めることが出発点となる。日本語との関係を考え合せながら自分の将来像を具体的に描き、長・中・短期的な学習計画を立案し、学習の進捗状況を自身で記録し、自らの決めた基準によって自己評価を行い、計画通りに学習が進展しているなら次の新しい目標を立て、予定通りに学習が進んでいないなら学習計画や学習方法を見直す。常に自らの学びのことを考え、主体的に行動することによってのみ、自律的な日本語学習者に近づける。

日本語学習に臨む留学生に求められるこのような自己成長の姿勢は、言葉の学習に限って当てはまるものではない。また、留学生に対する教育・支援にだけ適用できる考え方でもない。主体性をもって取り組む自律的な学習姿勢を育むことは、一生役立つ問題発見解決能力を身につけ、生涯に渡って学び続ける人間を育成することにつながるはずである（細川 2003）。そして、この自律した人材を育てることこそが、次世代の大学人が持つ責務である。

このような将来あるべき大学像を見据えた先駆的な試みは、単独で学びを完結させようとする従来型の授業や教室の在り方に対する挑戦となる。教室の壁を超え、授業とその他の学習リソースの間を軽々と跨いで学生が主体的に学んでいけるような大学空間を作り出していくには、留学生も含めた学生だけではなく、大学教職員にも固定的な「教室の中で」「教師に教わる」「教師が教える」といった学習観・教育観・教室観・授業観から脱却するよう促し、教室の外にも学びの世界を拓いていくような具体的行動を起こさなければならない。

既に述べたように、留学生の学習スタイルや信念は容易に変わるものではない。自律的学習者は、ゆっくりと、少ずつ成長していくものである。自律的支援者が成長するのにも、長い時間が必要だと述べた。同様に、留学生支援システムとわせた日本語サポートを運営し、その理念や成果を広く発信し続けることによって、新しい学びの在り方や哲学を浸透させ、大学を変えていこうとする試みも、非常に時間がかかる取り組みであり、根気と覚悟の要る挑戦である。

## 謝辞

留学生支援システム、および、わせだ日本語サポートの設置・運営に関しては、開設に向けた構想を練っている段階から、実現へ向けた準備を経て、試行錯誤しながら稼働している現段階に至るまで、多くの仲間たちの助力を得ている。特に、古賀和恵、中山英治、古屋憲章、守谷智美の各氏には大変お世話になった。また、早稲田大学日本語教育研究センターと大学院日本語教育研究科の教務陣をはじめとした教職員、並びに、わせだ日本語サポートの支援スタッフからも献身的・全面的な協力が得られた。未だ揺籃期にある留学生支援システムとわせだ日本語サポートが何とか運営できているのも、皆の惜しめない協力があったからこそである。ここに記して、感謝の意を表したい。

## 注

- 1) 留学生支援システムの開発と実践は、早稲田大学 2011-2012 年度特定課題研究 A (萌芽的研究) 「自律的日本語学習の支援を基盤とした留学生支援システムの構築」(研究代表: 細川英雄) の助成を受けて実現したものである。本稿も同助成による研究成果の一部である。
- 2) 2011 年度春学期は「日本語チュートリアル」という名称であったが、「チュートリアル」という言葉が想起させる「個人指導」というニュアンスを払拭するため、同年秋学期より「わせだ日本語サポート」に改称した。
- 3) 自らの学びを自己管理するという考え方は、「メタ認知」という概念と通底している。詳細は宮崎 (2009), 小嶋ほか (2010), 菅原 (2010) を参照のこと。
- 4) アドバイザーに求められる高い専門性は、ピア・サポートを原則とするわせだ日本語サポートの支援活動とは相容れないかも知れない。アドバイジングについては、大学院日本語教育研究科の専門科目と連携しながら、あくまで支援スタッフにできる範囲で実践していきたいと考えている。

## 参考文献

- 青木直子 (2001) 「教師の役割」 青木直子・尾崎明人・土岐哲 (編) 『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社, 182-197.
- 青木直子 (2010) 「日本語・日本語教育を研究する—学習者オートノミー, 自己主導型学習, 日本語ポートフォリオ, アドバイジング, セルフ・アクセス—」国際交流基金「日本語教育通信」(<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/research/201003.html>) (2011 年 12 月 1 日).
- 青木直子・田中賀之 (編) (2011) 『学習者オートノミー—日本語教育と外国語教育の未来のために—』ひつじ書房.
- 池上摩希子 (2009) 「『教室』の解体が創出するもの—『にほんご わせだの森』の実践から考える対話の可能性」水谷修 (監修) 『日本語教育の過去・現在・未来 (第 3 卷) — 教室』凡人社, 161-179.
- 井上孝代 (1999) 『留学生担当者のためのカウンセリング入門』アルク.
- 桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」(編著) (2007) 『自律を目指すことばの学習—さくら先生のチュートリアル—』凡人社.
- 小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 (編) (2010) 『成長する英語学習者—学習者要因と自律学習—』大

## 黒田史彦／留学生支援システムの構図

修館書店.

- 加賀美常美代（2010）「お茶の水女子大学ピアサポート体制の事例紹介—全学的取組と留学生支援を中心に—」『大学と学生』87号, 22-28.
- 菅原尚子（2010）『専修学校における学習アドバイジング・サービス：ラーニングアドバイザーによる自律学習能力育成の効果を検証する』（平成21年度 財団法人東京都私学財団私立学校研究助成研究成果報告書）専門学校神田外語学院.
- 関 昭典（2006）「動機づけ重視の英語学習指導」英語学習アドバイザー資格認定協議会（監修）『英語学習アドバイザー入門』アルク, 81-128.
- 浜田麻里・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子（2006）「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」国立国語研究所（編）『日本語教育の新たな文脈—学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性—』アルク.
- 細川英雄（2003）「問題発見解決学習としての総合活動型日本語教育」早稲田大学日本語教育研究センター「総合」研究会（編）『「総合」の考え方と方法』早稲田大学日本語教育研究センター.
- 宮崎里司（2009）「自律学習支援のためのタスクと学習ストラテジー」伴 紀子（監修）『タスクで伸ばす学習力—学習ストラテジーを活かした学びの設計—』凡人社, 12-27.
- 横田雅弘・白土悟（2004）『留学生アドバイジング—学習・生活・心理をいかに支援するか—』ナカニシヤ出版.